情報構造概念の再定義のための試論
―古典語助詞「こそ」の談話機能を中心として―

野村　学

キーワード：情報構造、新情報、旧情報、係助詞「こそ」

要　旨

情報構造の観点から古典語の助詞「こそ」を考えるとき、「こそ」の直前部分が新情報であるか旧情報であるかが議論されてきた。調査・考察の結果従来の新旧各情報の定義による「こそ」の機能には新情報的側面と旧情報的側面の二面性があることが判明し、「こそ」の持つ二段階の卓立機能が「こそ」における新情報・旧情報概念*1の統一的見解を難しくしてきたのであると主張する。そして結果的に古典語助詞「こそ」は話し手が聞き手に情報を伝達する際に重要度が高いと判断した情報に下接するということを明らかにした。

0．はじめに

情報構造の観点が現代語助詞「は」「が」の機能の差異を解明するのに有効な手段であることが近年の諸研究において明らかになっている。さらに最近ではこの観点を古典語にも持ち込もうとする研究があり、古典語の係助詞を対象にこの種の研究が進められている。

ところが現代語助詞「は」「が」など新情報・旧情報概念が比較的安定しているものに比して、古典語「こそ」においては新情報とするもの旧情報とするものの諸説があり、統一的な見解となっていない。そこで本論においては、古典語「こそ」の情報構造について『源氏物語』中の係助詞「こそ」を用いて明らかにし、その結果から「こそ」の情報構造概念との関わりについて新たな見解を立てていくことにしたい。

1．古典語助詞「こそ」は「新情報」か「旧情報」か？

「新情報」「旧情報」概念から日本語の助詞を論じた諸研究は多く存在するが、古典語助詞「こそ」について言及されているものについて、以下に諸氏の結論と思われるものを簡潔に挙げておく。

大野　晋	旧情報*2 に下接
北原保雄	旧情報*3 に下接

森野　崇	新情報に下接
半藤英明	新情報に下接
小川栄一	新情報に下接

図１　先行研究による「こそ」直上の情報構造

以上のように、古典語助詞「こそ」直上の情報構造は見解が分かれており、結論は未だである。そこで、古典語助詞「こそ」について、『源氏物語』（日本古典文学全集　小学館刊）から用例を抽出し、「こそ」直上が新情報であるか、旧情報であるかを弁別してみた。

調査の結果、源氏物語全編中の「こそ」は 1887 例に及び、これらの全用例の調査項目別の結果は以下のようになった。

新情報　1271/1887 例　(67.4%)
旧情報　616/1887 例　(32.6%)

図２　調査結果

新情報を担うと考えられる「こそ」が、旧情報を担う「こそ」の倍近くを占める結果になった。この結果からは「こそ」が新情報を担うとも、旧情報を担うとも断言できない。

２．考察

２．１．疑問点

なぜ「新情報」「旧情報」概念において古典語の「こそ」の情報構造が上述の結果のようになるのであろうか？つまり新旧どちらかに統一されてこそ「新情報」「旧情報」概念を用いる意味があると思われるのだが、実際は「新情報」になるもの、「旧情報」になるものとまちまちである。そこでもう一度用例中の「こそ」について、その談話内での働きを考えることにする。

２．２．「こそ」の意味・働き

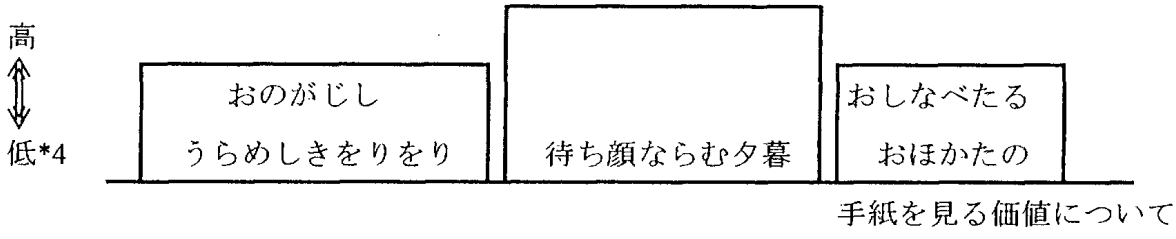
先ほどの調査の用例で考えると、

(1)

・・・。おのがじしうらめしきをりをり、待ち顔ならむ夕暮などのこそ、見どころはあらめ」と怨ずれば、やむごとなくせちに隠したまふべきなどは、かやうにおほぞうなる御厨子などにうち置き、散らしたまふべくもあらず・・・。　新情報（帚木）

の「こそ」の働きは、

(1')



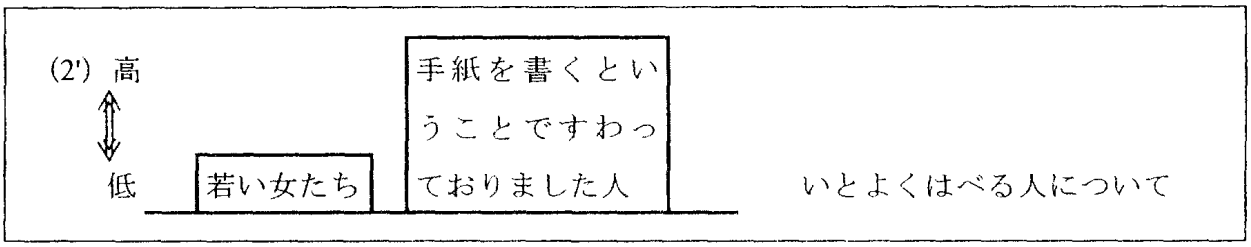
というようになると考えられる。

この部分は、先の調査では「新情報」に分類したものである。「こそ」によって下接を受けることで、前文脈として聞き手の知識になっている「おのがじしうらめしきをりをり」、「おしなべたるおほかたの」と、今回「こそ」によって下接された「待ち顔ならむ夕暮」との関係を上記の図のように示し、どんなときの手紙が見る価値があるかということに関して、見る価値が高いと話し手が判断するものを示す働きを「こそ」が行っているということになると考えられる。

以下、同様に検討していく。

(2)

惟光、日ごろありて参れり。「わづらひはべる人、なほ弱げにはべれば、とかく見たまへあつかひてなむ」など聞こえて、近く参り寄りて聞こゆ。「仰せられし後なん、隣のこと知りてはべる者呼びて、問はせはべりしかど、はかばかしくも申しはべらず。いと忍びて、五月のころほひよりものしたまふ人なんあるべけれど、その人とは、さらに家の内の人にだに知らせず、となん申す。時々中垣のかいま見しはべるに、げに若き女どもの透影見えはべり。褶だつものかごとばかりひきかけて、かしづく人はべるなめり。昨日、夕日のなごりなくさし入りてはべりしに、文書くとてゐてはべりし人の顔こそ、いとよくはべりしか。・・・」　新情報（夕顔）



にような形式になっていると思われる。

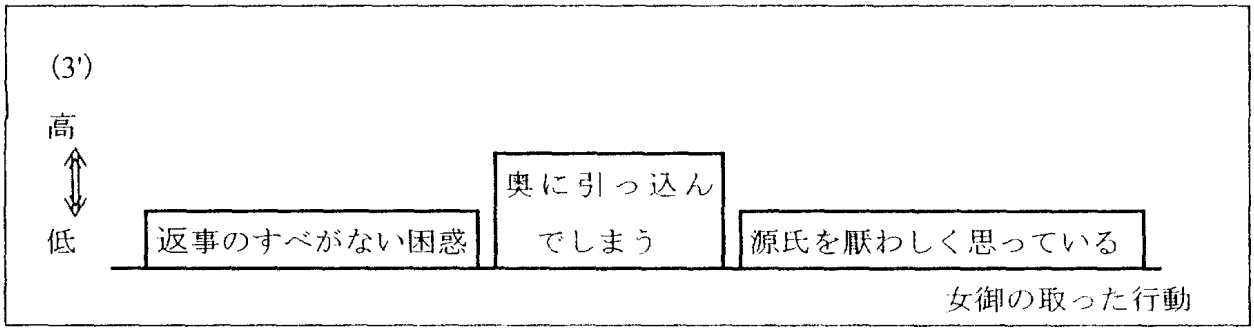
この例でも以前は「夕日のなごりなくさし入りてはべりしに、文書くとてゐてはべりし人の顔」の部分が聞き手にとって新しい項目であると判断していたが、話し手が判断し聞き手に示そうとする態度を考えると、上の図のようになり、「こそ」はここでも直上に置く語句と他のもののテーマを設定し、そこにテーマについての度合いの高低を示してその上で、「こそ」直上の項目が突出していることを示す働きをしていると思われる。

さらに、先の調査で「旧情報」とされた以下の例

(3)

「あさましう疎ませたまひぬるかな。まことに心深き人はかくこそあらざなれ。よし、今よりは憎ませたまふなよ。つらからむ」とて、渡りたまひぬ。　旧情報（薄雲）

直前に源氏が女御に贈った和歌について「女御が返事のすべがない」、また「源氏が言っていることに合点がいかなくて、源氏のことを厭わしく思っている」また、「和歌を贈ってしまった自分自身について後悔している源氏の姿をも疎ましく思っている」そして「女御はそっと少しずつ奥に入ってしまう」という流れの中で、自分が本当に思慮深い人なら、奥に下がられるような行動はとられないだろうとさらに反省している。「かく」とは「女御が奥に引っ込む行動」を指している。つまり、



ここでは女御の取った行動について順位づけを行っている。「こそ」の担っている役割は、どうやら順位付け*5 であるようである。そして、この例では文脈に「奥に引っ込んでしまう」以外の候補が表れてきている。尚、本例の「こそ」直上の「かく」は「奥に引っ込んでしまう」を指している。
このように考えると、やはり従来の新情報・旧情報の概念では、「こそ」の機能をとらえることは難しいと言わざるをえない。

2．3．「こそ」の機能的考察

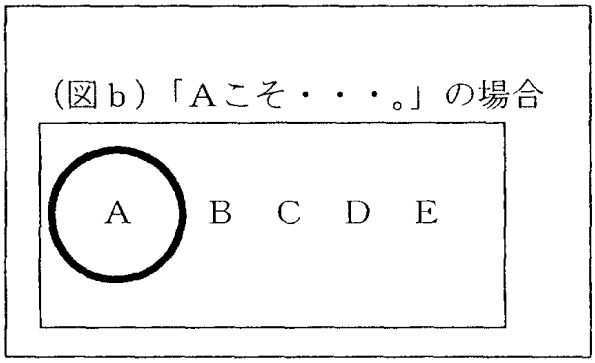
では、談話内での係助詞「こそ」の働きはどのようなものであるのだろうか。以下に具体的に述べていくことにする。

「こそ」は範囲を括りさらにその括った中に残ったいくつかの項目の質・量を量り、その大小（上下）関係を考慮し、その中でもっとも突出した項目を取り立てると考えられる。この「こそ」の括る範囲というのは、話し手が聞き手に情報を伝達する際に「こそ」によって取り立てた語句の周辺（文脈上）の事柄のうち、敢えて文或いは単語としてあらわさなくても関係性が或る程度明確なものであり、例えば「今こそ分かれめ」の場合、「こそ」によって取り立てられた「今」から想定できる時間に関わる他の項目である。つまり「今こそ分かれめ」の例の場合、「こそ」以下の「分かれめ」（分かれよう）とするのに最も適切な時（時間）はいつかというテーマの中で、「今」を提示している。誰にとっても時間の概念は比較的容易に理解でき、その結果、話し手はもちろん聞き手にとっても既に得ている情報として認識しやすいという結果になっていると考えられる。ところが「こそ」の働きはこれにとどまるわけではなく、上述のように取り立てられた語句集団の中でもっとも突出したものを更に取り立てる働きも併せて持っていると考えられる。この段階においては、聞き手にとって新たな情報であると思われる。

従って、古典語「こそ」は

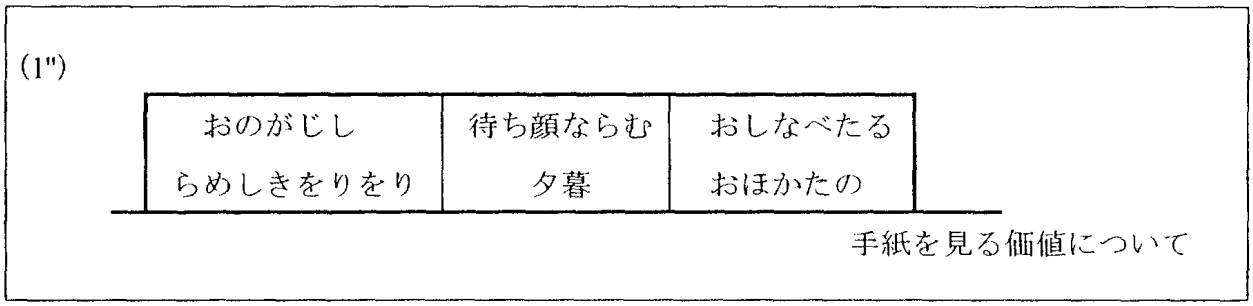
① 直上の語句を文脈から考えることの出来るいくつかの周辺候補*6 を含んだ状態で取り出す。（図ａ）

（図ａ）「Ａこそ・・・。」の場合

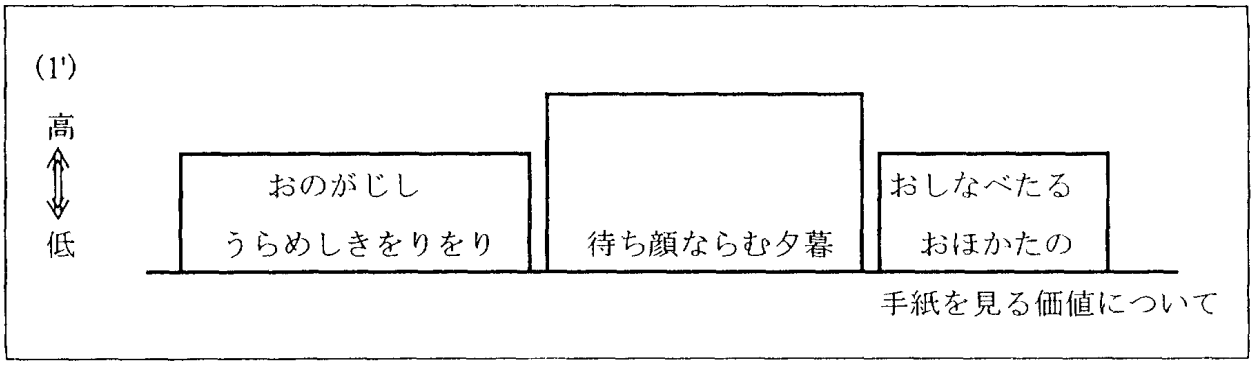


② ①で取り出された候補から「こそ」直上の語句を最も適合するものとして取り出す。(図b)

という二つの働きを持っているのではないかと考えられる。尚、この二つの働きは常に連続して起こり、「こそ」の用例によってどちらか片方のみの働きを持つということはないと考えられる。しかしながら、「こそ」の機能を上述のように二段階の働きと考えると、解釈上先の①の機能 に力点を置くように見えるもの、②の機能に力点を 置くように見えるものがあるのではないかということが推測できる。つまり従来前者は旧情報的解釈を、後者は新情報的解釈を受けるものであったということになる。先の(1)の用例で考えると、



まず、先の図aのように直上の語句を文脈から考えることの出来る周辺の候補(「おのがじしうらめしきをりをり」「待ち顔ならむ夕暮」「おしなべたるおほかたの」)を含んだ状態で取り出す。(図a) そしてその後、



図aで取り出された候補の中から「こそ」直上の語句(「待ち顔ならむ夕暮」)を最も適合するものとして取り出す。と考えられる。

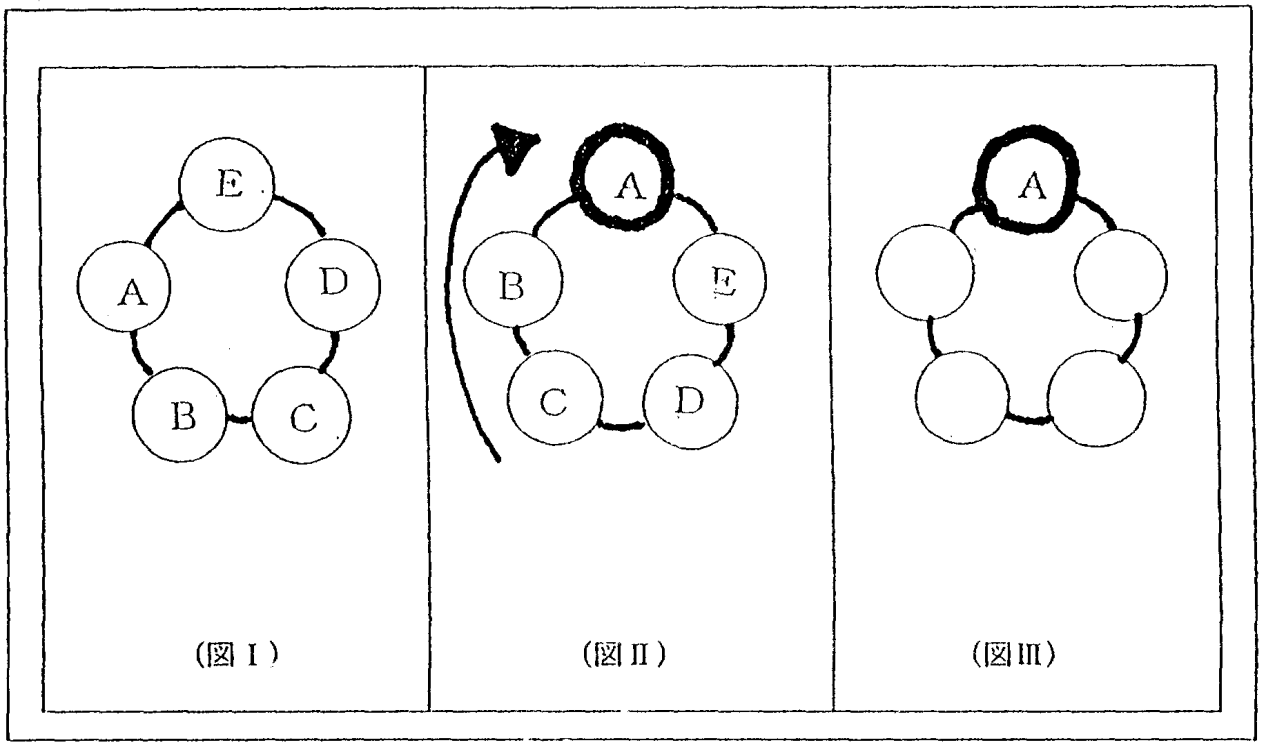
つまり、従来の新情報・旧情報概念は古典語「こそ」において、「こそ」の実際の機能とは合致しない部分があるのではないかということが指摘できる。

2．4．「こそ」の機能から見た新情報・旧情報

先に述べた「こそ」の二面性から、新情報・旧情報の本質とはいったいどんなものかということについて再び考えていくことにする。

上述の調査結果によって言語学大事典による新情報・旧情報の定義では「こそ」が新情報を担うものか、それとも旧情報を担うものかを断定することが出来ないことが証明された。

係助詞「こそ」は、先に述べたように連続した二つの段階を経て、上接語を取り立てる働きがあると考えられる。しかしながら、従来の新情報・旧情報の概念でこの「こそ」をとらえようとすると、どちらの側面も現れることがあって、判断が難しいことが起こってくる。このことは、「こそ」が持つ機能のうち、先に述べた「① 直上の語句を文脈から考えることの出来るいくつかの周辺候補を含んだ状態で取り出す。」という部分と深く関わっているのであると考える。遊園地の観覧車を例に考えるとわかりやすいかも知れない。遊園地の観覧車はいくつもの客室がある。仮に客車が5室あるとして、この5個の候補から1つの客車を選び出すのが、「こそ」の最終的な働きである。つまり、観覧車に客が各々乗っていく状態が、先の「① 直上の語句を文脈から考えることの出来るいくつかの周辺候補を含んだ状態で取り出す。」という段階（図Ⅰ）であり、その中から一つの客車を一番高い場所に移動させること（図Ⅱ）が 「② ①で取り出された候補から「こそ」直上の語句を最も適合するものとして取り出す。」ということに当たると考える。とすると、ここで言う客は「こそ」の機能①によって選ばれた情報候補ということになる。ところが、観覧車の客車には、常に客が乗り合わせているということはなくて、空席の客車が出来ること（図Ⅲ）がある。この場合は選ばれるべき候補がないということになり、結果先の①の機能が働いていないように見えることになり、②の卓立機能のみが働いているように見えるのであろう。同じ助詞「こそ」によって下接される事項でも、新情報を担うように見えたり、旧情報に担うように見えたりすることがあるのはこのためであると考えられる。



(図Ⅰ) (図Ⅱ) (図Ⅲ)

また、話し手の発話意図から考えても、より重要な情報ほど、他の周辺情報を付加した形で聞き手に示しておいた方が、理解が容易になると判断しているのではないだろうか。上述のような流れで、話し手が新たに重要と判断して情報量を増やして伝達しようとした事柄が、聞き手に既に知っている事柄のように伝わることがあると考えることが出来る。

このように考えると、話し手が新情報のつもりで聞き手に伝達したつもりでも、聞き手が情報を受容するときに旧情報のように解釈してしまうことがあることがあると考えられ、この種の術語に諸説の混乱があることの原因の一端が明らかになった。

つまり、新情報・旧情報という術語は談話の結果的な側面に注目したものであり、どうしても聞き手と話し手の立場が混乱しやすい。従って以下のように整理・統合されるべきであると考えられる。

重要度の高い情報	話し手が聞き手に伝達する情報の中で重要と判断して、多くの周辺情報を含ませているもの。聞き手にとっては解釈の結果旧情報となることがある。
重要度の低い情報	話し手が聞き手に伝達する情報の中で特にたくさんの周辺情報を含ませなくても、聞き手に十分伝わると考え、情報量を低くしているもしくは情報量に変化を与えないもの。聞き手にとっ

ては新情報と感じられることがある。

そして「こそ」は、先に述べた働きから重要度の高い情報に下接するのではないかという仮説を立てる。もしこの仮説が正しいとすれば、従来の「こそ」の意味解釈である「強調」とも矛盾しない。話し手が重要度を高く設定した情報が「強調」と解されるのは当然であるからである。他の多くの係り結びを起こす係助詞の解釈が「強調」であることは、やはり情報構造に何らかの影響を与える役目をこれら係助詞が担っていることの証左になりうると考える。

以上のような再定義を踏まえ、以下に先の調査の用例を再検討していきたい。先の調査で「新情報」とされた以下の例

(1)

・・・。おのがじしうらめしきをりをり、待ち顔ならむ夕暮などのこそ、見どころはあらめ」と怨ずれば、やむごとなくせちに隠したまふべきなどは、かやうにおほぞうなる御厨子などにうち置き、散らしたまふべくもあらず・・・。

新情報（帚木）

の「こそ」の働きは、話し手が聞き手に情報を伝達していくのに、「待ち顔ならむ夕暮」の部分を重要と判断し、周辺の情報である「おのがじしうらめしきをりをり」や「おしなべたるおほかたの」を係助詞「こそ」の機能を用いて伝達しようとしている。つまり「待ち顔ならむ夕暮」は重要度の高い項目となる。
以下、同様に検討していく。

(2)

惟光、日ごろありて参れり。「わづらひはべる人、なほ弱げにはべれば、とかく見たまへあつかひてなむ」など聞こえて、近く参り寄りて聞こゆ。「仰せられし後なん、隣のこと知りてはべる者呼びて、問はせはべりしかど、はかばかしくも申しはべらず。いと忍びて、五月のころほひよりものしたまふ人なんあるべけれど、その人とは、さらに家の内の人にだに知らせず、となん申す。時々中垣のかいま見しはべるに、げに若き女どもの透影見えはべり。褶だつものかごとばかりひきかけて、かしづく人はべるなめり。昨日、夕日のなごりなくさし入りてはべりしに、文書くとてゐてはべりし人の顔こそ、いとよくはべりしか。・・・」　新情報（夕顔）

この例でも以前は「夕日のなごりなくさし入りてはべりしに、文書くとてゐてはべりし人の顔」の部分が聞き手に伝達する上で重要項目であると判断し、周辺の「若い女たち」を係助詞「こそ」の機能を用いて伝達しようとしている。つまり「文書くとてゐてはべりし人の顔」は重要度の高い項目となる。
さらに、先の調査で「旧情報」とされた以下の例

(4)
「かかる童どちだに、いかにざれたりけり。まろこそなほ例にしつべく、心のどけさは人に似ざりけれ」 旧情報（蛍）

先の調査では「まろ」自体を聞き手が知っているかどうかということを問題にして旧情報と判断していたが、そうではなく、「まろ」が後の「おっとりしているとか世慣れしていない人」と結びつくのに最もふさわしく重要と話し手が判断し、係助詞「こそ」の機能を用いて伝達しようとしている。つまり「まろ」は重要度の高い項目となる。

(5)
「かれか」など問ふなかに、言ひあつるもあり、もて離れたることをも思ひ寄せて疑ふもをかしと思せど、言少なにて、とかく紛らはしつつとり隠したまひつ。「そこにこそ多くつどへたまふらめ。すこし見ばや。さてなん、この廚子も快く開くべき」 旧情報（帚木）

ここでは、中将と源氏との会話の場面で「中将の所」「私（源氏）の所」を比較し、中将の所の方がたくさん集めているので、「こそ」を用いて中将の所の方が程度が高い、つまり重要であると示しているということになる。

3．結論

古典語助詞「こそ」は話し手が聞き手に明確に認識して欲しいと考える語句を「こそ」で取り立てた語句を含む周辺の情報から「こそ」によって取り立てた語句を選択し、その選択した語句が他の周辺の情報を付け加えることによって、より情報程度が高いということを聞き手に新たに示す働きを持っていると考えられる。

従来旧情報と考えられた「こそ」は上述の「こそ」のもつ二面性のうち①の側面を強く想起させるものであり、他方新情報とされたものは②の側面を強く想起させるものであると思われる。

また古典語助詞「こそ」の情報構造に関する諸研究の意見の違いは、「こそ」の機能の二段階性に起因していて、新旧情報では捉えにくくなっていると考えられる。そういった点で、今回示した情報重要度という考え方は、新情報・旧情報に代わる術語として更に他の助詞について検討していく必要があると思われる。

4．残された課題

本稿においては、情報構造という観点から、古典語助詞「こそ」の機能を明らかにする過程で「こそ」の機能が従来の研究において新情報・旧情報概念によって明確にならなかった原因である「こそ」の二段階性（連続した二段階のとりたて）に言及し、談話内における「こそ」の働きを明らかにすることができたと思う。

しかしながら、これら本研究で明らかになったことは、今後更に他の係助詞やその他助詞について調査していき、それをつなぎ合わせることによって、本来の助詞の働きの全容が明らかになるものである。またここで述べた「こそ」のもつ二段階性が他の助詞（特に係助詞）に言えるのか、また仮に「こそ」のみがこの働きを持っているとすれば、「こそ」の結びの特殊性とどう関わるかについても結論は未だである。

これらのことは本論が残した課題であり、今後更に研究する必要がある。

脚注

*1　『言語学大事典』によると、

一般的に、新情報は、話し手が聞き手に伝えようとする新しい情報知識であり、旧情報は、聞き手が共有していると話し手が想定する情報知識である。

と記述されている。

*2　大野氏の旧情報は「既知」・「確定」・「確実」などの術語と併記されている。これらを別概念とする見解もあるが、私見では大野氏の言う「既知」をはじめとする上述の術語は旧情報に集約して差し支えないように思われる。

*3　北原氏も大野氏と同様に「既知」という語を用いる。しかしながら内実はここで述べる旧情報とほぼ同じ概念である。

*4　情報価値の高低を示す。一般に新情報は情報価値が高く、旧情報は低いとされる。

*5　ここで言う「こそ」の順位付けとは一位を選ぶと言うことであって、二位、三位を決定していると言うことではない。つまり、最も突出しているものを取り立てるのが、「こそ」の働きであると考えるものである。

*6　文脈上に既出の事項、或いは文脈に現れていなくても話し手が、聞き手にとって文脈から推測または理解可能と判断した事項

参考文献

大野　晋　『係り結びの研究』岩波書店　1993

小川　栄一　「係結びと焦点」
(『福井大学教育学部紀要Ⅰ《人文科学、国語学、国文学、中国学編》37　1989)

北原　保雄　「情報伝達と構文」(『ユリイカ』16-12　青土社　1984)

阪倉　篤義　『日本語表現の流れ』　岩波書店　1993

定延利之他　「〈用語解説〉旧情報と新情報」
(音声文法研究会編　『文法と音声Ⅱ』　くろしお出版　1999)

半藤　英明　「「限定」と「取り立て」の視座」

森野　崇　「情報構造と係助詞－『は』及び『ぞ』『なむ』『こそ』の場合－」
(『学術研究』36　早稲田大学教育学部　1989)

―　東北大学大学院生　―